日本台湾学会第７回学術大会記念講演

2005 年 6 月 4 日
於　天理大学９号棟（ふるさと会館）

# 国史館と台湾史研究

張　炎憲

はじめに
第１節　戒厳体制と台湾史研究
第２節　戒厳令解除後の台湾史研究
第３節　2000 年総統選挙と台湾史研究
第４節　国史館と台湾史研究
第５節　台湾史と国史
おわりに

## はじめに

歴史は時代の発展を反映したものであり、また、時代の発展過程の生き証人でもある。台湾史とは台湾の土地並びにそこに住む人々を中心とした歴史の記録であり、中国、日本並びに他の国に従属したものではなく、台湾人主体の観点を持つものである。台湾史は台湾人の歴史の発展における喜びや辛酸、そして衝突と努力を反映した、独特の性質を持っている。

日本史は必然的に日本人の成就を中心とした記述となり、アメリカ史もアメリカ人の成就が記述の中心となるのは必然ではあるが、こと台湾史に至っては二つの外的要因により、台湾人の成就を中心において記述できない不幸があった。

一つは、台湾史はその歴史の記述がはじまって以来、常に外来政権の統治を受けてきた。初めにオランダ、スペインの欧州列強諸国、続いて鄭氏政権、清国、日本、そして現在の中華民国政権である。これらの統治者はすべて外来の移入者であり、武力による略奪によって、台湾を占拠し、統治してきたのである。これら外来政権は、台湾接収後、教育を通じてそれらの国の歴史文化を台湾に植え付け、台湾人を自らの体系へと組み込んだ。また、歴史解釈の権利を手にし、台湾人に忠誠心を植えつけ、その統治の合理性を正当化した。

もう一つは、中華人民共和国による圧力である。中国は台湾に対し、政治的な包囲や、軍事的な恫喝、経済的な誘惑のみならず、台湾を神聖不可分な中国の一部として、台湾、中国間の血縁や文化、歴史等の共通性を強調することによって、台湾人の台湾意識や独立意識の芽生えや発展を抑え、台湾人の歴史的思惟を左右してきた。これら二つの外的要因が、台湾史の確立に、度重なる苦難と挑戦をもたらしたのである。

## 第１節　戒厳体制と台湾史研究

台湾史の発展は台湾政治の変遷と密接な関係がある。国民党政府は 1945 年に台湾を接収した

後、日本化の排除を励行し、中国化教育により、中国歴史文化の優越性と、その偉大さ、そして台湾は中国の一部であるという観点を強調した。1949 年の大陸撤退後、戒厳令を発動して、人民の思想、言論、出版、移住等の自由を剥奪し、一党独裁体制を確立した。

1947 年、228 事件発生後、日本統治時代に育った台湾知識層のほとんどが、逮捕され銃殺された。これによって、運良く銃殺を逃れた者達も政治の問題から距離を取るようになり、あるいは党政者に妥協して、敏感な政治の問題を談義するのを避け、息を潜めるようになっていった。

1949 年以降、国民党政府は盛んに反対分子の逮捕を進め、これにより政権を強固なものにし、左派勢力を抑制し、独立思想を断絶していった。白色テロ時代の始まりである。

台湾人はこの物言えぬ時代により、歴史の記憶を失い、そして歴史の継承をも失った。先代は後代に己の経験を継承できなくなり、後代は先代の経験から、何も学べなくなってしまった。「台湾」、「台湾人」、「台湾史」、「台湾文学」そして『台湾語』はタブーとされ、抑圧されていくのであった。

このような政治社会の下、台湾史の研究は無視され、排除されていった。台湾人は自らの歴史を理解することができず、中国の歴史文化の学習を強制された。この抑圧された苦悶の時代、台湾史の研究者は学校教育の場に入ることを許されず、それを生業とはできないながらも、台湾への愛を抱き続け、台湾研究の灯火を守り続けた。日本統治時代を生きた廖漢臣や王詩琅、呉新栄等の台湾史研究者は、民間や地方の文献会で働き、余暇を利用して実地調査に努め、多くの貴重な資料を残し、その後の台湾史研究の重要な基礎を築いた。

楊雲萍、黄得時、載炎輝等の大学で教鞭をとる事を許された台湾人エリート達も、台湾史や台湾文学、台湾法律史の講座を開くことはできず、本意を隠し、常に隠れた形で、別の名義で開いた講座で幾ばくか台湾に触れるのがやっとであった。楊雲萍は、台湾史の講座を開設したが、それも数年に一度であり、授業内容は鄭成功時代に止め、敏感な政治、社会の問題に言及するのを避けた。

白色テロの時代、台湾史研究はその立場を隠し、国民党政権及び中国史の権威に公然と挑むことはできなかった。1970 年代に至って、状況に多少の変化が現れた。1971 年、国民党政府が国際連合を脱退した後、蒋経国は行政院の院長を引き継ぎ、台湾人の反抗意識の低下を目的とし、国民党政権の延命を図る為、台湾人エリートの抜擢政策を実施した。林洋港、李登輝等は、この時抜擢されたのである。

蒋経国は海外の台湾独立運動勢力の拡大や、国民党の掲げる「大陸反抗」「一つの中国」政策に対する台湾島内の質疑や挑戦に対処する為、「台湾人の祖先は中国から来た」、「血は水より濃し」、「五百年前は一つの家族」等のスローガンを掲げて大キャンペーンを展開し、中国意識と、台湾は中国の一部であるとする観念の強化に努め、台湾人に祖国である中国に帰属すべしと要求した。

これにより、救国団は台湾史蹟源流会を発足させ、毎年夏と冬に二回の研修を実施し、参加者にこれらの観念を植え付けた。これは政治的意図に満ちた政策であったが、これを機に台湾の歴史を知った新世代の者達の一部は、その後台湾史研究に身を投じていったのであった。

このような流れの中、淡江大学、師範大学、成功大学は台湾史蹟考査の講座を開講し、史蹟の

紹介を通して台湾を理解するようになった。しかしながら、正規の学校教育のカリキュラムでは未だ台湾史研究の名での開講は不可能であったが、次第に門戸を開き始め、台湾史研究は回り道をしたものの、ようやく学校教育の現場に現れ始めたのであった。台湾民主化運動の高まりによって、台湾史の研究は更に大きな一歩を歩み、民主運動に従事した者達の多くは郷土への思いと台湾意識を心に抱き、台湾史研究を熱心に提唱した。民主運動のうねりの中、台湾史研究は次第に重視され始めたのであった。

## 第２節　戒厳令解除後の台湾史研究

1979 年の美麗島事件は台湾民主化運動の転換点となった。美麗島事件発生後、1970 年代に民主化運動に参加した台湾人エリート達は、そのほとんどが逮捕された。彼らの法廷での慷慨は、台湾を愛する叫びの声であり、国民党によって縛られ続けた台湾民衆の魂を感動させた。この影響を受けて、台湾人の心に芽生えた台湾意識は日増しに増大していった。

1980 年代、新世代の者達は党外活動に身を投じ、美麗島の人たちの、民主の灯火を継承していった。しかし彼らの訴えはその後の 1990 年代の自由民主運動のみならず、女性運動、原住民運動、農民運動、労働運動、環境運動、消費者運動等の様々な社会運動に形を変え、展開していったのであった。

1980 年代初期、党外雑誌が雨後の筍の如くあらわれ、国民党の一党独裁批判以外にも、台湾史上の問題を百花斉放して検討し、台湾意識と中国意識そして台湾と中国の関係を再検討した。呉鳳伝説を打ち破り、呉鳳像を打ち倒し、呉鳳郷を阿里山郷に改名し、台湾史上の大中華優越主義を打ち破り、原住民の歴史的重要性を打ち立てた。

台湾意識の台頭は台湾研究の新興を促す結果となった。1986 年、中央研究院の張光直は、院長の呉大猷から台湾史フィールドスタディー計画の成立を勝ち取り、国家科学発展委員会に研究費の補助を申請した。また、民族研究所、近代史研究所、歴史語学研究所、並びに社会科学研究所の四つの研究所が合同で経費を援助した。翌年、中央研究院の非公式の組織として台湾フィールドスタディー研究室と改めた。

1970 年代に実施され、民俗学、社会学、地理学、動物学、地質学などの地域的な研究を主とした濁大計画と違い、台湾史フィールドスタディー研究室は台湾史の研究を主とし、考古学、地理学、民族学、社会学、民俗学、言語学、宗教学等、その学術的な領域を越えて、台湾のすべてを研究対象とした。

台湾史フィールドスタディー研究室発足当時は、中央研究院並びに学界はこれをあまり快く思っておらず、またすぐにでも閉鎖されるであろうと思っていた。彼らは、台湾史研究は人材にも乏しく、そして台湾の歴史はとても短く、その範囲も狭く研究に値しないと考えていたのである。彼らは更に、台湾史の研究が台湾意識を触発し、大中華意識の転覆を図る存在になるのを危惧していた。実際、台湾史の研究者の多くは台湾意識を持つもの達であったため、当時の学会の権威達は台湾史研究室に対する全面的な支持を打ち出したくはなかったのである。学界にはびこる大

中国意識の保守的な流れの下、台湾史フィールドスタディー研究室の発展は困難を極め、正式な研究所を成立させるにあたって、更なる各方面からの妨害に遭った。

1991 年、臨時条項の廃棄を決議し、反乱鎮定動員時期の終結を宣言した後、台湾は困難を極める憲法改正の作業を展開した。1991 年、中央民意代表の万年議員が全面退職し、1992 年末、第二期立法委員選挙を実施し、その結果、民進党は 52 議席を獲得した。獲得議席数は、国民党のそれには遠く及ばないものの、民主化運動の重大な成果といえるであろう。民進党は直ちに立法院に、中央研究院の台湾史研究重視を要求した。中央研究院は、政治変化の流れに対応すべく、1993 年台湾史研究所準備部門の成立を発表した。台湾史フィールドスタディー研究室はこの準備部門に編入され、七年の歴史の幕を閉じた。

台湾史フィールドスタディー研究室は歴史調査を重視し、研究員達は古文書や寺院の台帳、家系図等の収集、並びに口述歴史の調査のため台湾各地に飛び、多くの貴重な史料を残した。研究室が提唱した平埔族研究、聚落研究、考古学、民間宗教、日本統治時代の研究等は、後に重要な研究の趨勢となり、既に様々な成果を挙げている。

台湾史フィールドスタディー研究室は中央研究院の臨時的な組織でありながら、学校教育現場初の大規模な長期計画であった。これに従い大学、大学院内において、次々と台湾研究に相当する学部の開設、若しくは台湾関係の講座の開設がなされた。台湾史研究は歴史学のみならず、政治学、社会学、心理学、経済学、文学、芸術、建築学へと広がりを見せた。台湾史研究はすでに新興の研究分野として、従来の学術研究の範囲を超え、『台湾研究』や『台湾学研究』と呼ばれるようになった。

1987 年 7 月の戒厳令の解除は民主化運動の大きな道しるべとなり、台湾史研究をその束縛から解放した。1980 年代の論争を経て、台湾文学はもはや中国文学の支流ではなくなり、独立した一つの文学となった。そして、台湾史研究は中国史の枠組みから離脱し、独自の発展を始めた台湾史研究の一つの重要な研究テーマとなった。これらのターニングポイントとなる変革は、その後 1990 年代に民主化と台湾化の進展に伴い、更なる発展を遂げた。台湾史を研究する者は日増しに増加し、大学の台湾に関する講座も日増しに増加した。国家レベルの文化建設委員会や、県や市の文化局は、台湾関連の書籍の出版を、施政の重要課題とした。また、都市計画、文化産業、地方史等の調査や執筆等の研究や政策は熱気を帯び始め、その熱気は台湾史を次第に舞台の上へと突き動かし、国民党の中国史観に取って代わり、勢力図を塗り替える動力源となった。

## 第３節　2000 年総統選挙と台湾史研究

2000 年の総統選挙の結果、民進党の陳水扁が総統に当選し、55 年にも及ぶ国民党の統治が幕を閉じた。陳水扁当選の勝因は国民党の分裂ではあったが、選挙の結果は台湾の民主化を更に深く、“主体台湾”のパワーを大きなものにした。

国民党統治時代、国民党が標榜した大中華意識と中国歴史文化は台湾人の思惟を押さえつけ、台湾史を亜流と見なし、決して主流にはさせなかった。それらが陳水扁の当選で、大きく様変わ

りし、民主化と台湾化の歴史は見直され、台湾の力の所在、並びに台湾人を主体としたいという渇望を再認識させたのであった。

かつて国民党は、自らの立場からのみ歴史を注釈し、台湾本土のパワーを抑圧し、台湾主体の観点を無視し続けた。2000 年以降、これらの抑圧は、台湾政治の動力源となり、また台湾史解釈の動力源ともなった。この逆転劇は、歴史解釈を転覆させ、台湾史の多元性を豊富なものにし、台湾人の成就を台湾史解釈の中心にした。

## 第４節　国史館と台湾史研究

1957 年､国史館は台湾にあらためて開館され､その後まもなくして新店市の北宜路に移転した。台北の喧騒から離れた、静かな山紫水明の地は、史学を思考し研究するには申し分ない場所である。国史館は総統府の直属で、設立当初は中国伝統史学の精神を持つ崇高な機関であり、国のために歴史を残す事を使命としてきた。国史館は収集部門、監修部門、編纂部門、秘書の四つの単位からなる。収集部門は資料収集を担当し、監修部門は図書目録の作成や史料や書物の所蔵、閲覧を担当、編纂部門は史料の編集、研究、発表と出版を請け負う部門であり、秘書部門は総務を担当する部門である。

国史館の所蔵史料は 1000 万件以上にも上り､その中には国民政府史料､蒋介石総統ファイル、蒋経国総統ファイル、閻錫山ファイル、資源委員会及び中央政府各部会の史料等、大変貴重なものも存在する。

2002 年、台湾省文献委員会は国史館台湾文献館と名を改め、国史館の一機関となった。この国史館台湾文献館には、日本統治時代の台湾総督府の公文書、専売局の公文書、台湾拓殖株式会社の公文書と戦後の省政府の公文書等、貴重な史料を所蔵している。この両館は、現在台湾において最も所蔵資料の多い機関であり、民国史と台湾史研究にとっての宝庫である。

国史館の 2000 年以降の発展は、概ね以下の方向に分けられる。

### １．台湾民主運動史料の収集と出版

台湾民主化運動は台湾史の方向性を変えた、重要な要素である。これまでこれらの史料は決して多くなかった。しかしながら、2000 年以降、国史館は積極的に民間史料や政府の公文書を収集し、また、台湾民主運動史料集や雷震案史料等を出版してきた。

### ２．台湾主権論述の史料や論文の収集と出版

過去において、台湾の主権を討論することはタブーとされてきた。しかしこれは国家の在り方と発展に関するテーマであり、台湾にとっては非常に重要なものなのである。国史館は、研究者や一般民衆が台湾の置かれた苦難の境遇を理解してくれる事を願い、これらの史料収集と出版を重ねた。

**３．228 事件の史料の出版**

2002 年以降、国史館は『228 事件ファイル集』を 16 冊出版してきた。これは台湾省文献委員会と中央研究院近代史研究所に続いて、公文書を取り扱ったものとしては最大の出版である。228 事件は戦後台湾の最大のタブーである。史料の出版はこのタブーを打ち破る最良の方法であり、また、228 の真相を洗いなおすのにも最良である。

**４．総統、副総統に関する史料の出版**

蒋介石総統ファイル、蒋経国総統写真集、陳誠副総統回顧録、謝東閔副総統全集、李登輝総統手記、写真集等の出版等は、現代史を理解するのに非常に重要な参考資料となる。

**５．李登輝総統の口述歴史の取材記録**

蒋介石、蒋経国両総統共に、在任中に逝去した。権力の時代、誰も口述歴史を取材することはできなかったが、李登輝総統は退任後、国史館の取材を受け入れ、貴重な証言を残した。

また上記の出版以外に、国史館では史料の所蔵、管理の長期計画に従事している。

**１．重要史料のデータベース化**

国史館では国民政府、蒋介石ファイル、資源委員会等の重要史料を優先的にスキャニングしてデータベース化している。これは史料の保存の以外にも、一般利用者の史料検索にも非常に有益である。

**２．国家歴史資料庫の開設**

1945 年以降の歴史の出版物、論文、学界の成果等をそれぞれのタイプ別に一年ずつ分類し、データベース化している。更に重要項目には解釈も加えており、今後の歴史研究の大いなる礎となっている。

国史館は歴史の研究者達を鼓舞すべく、また、学術研究を導くため、『国史館刊』を改め、内外の研究論文を収めた『学術集刊』を出版してきた。更に、討論会や学術発表会を多く主催している。

## 第５節　台湾史と国史

2002 年 1 月台湾省文献委員会は国史館に組み込まれ、台湾史を国史へと引き上げた。国史館は近年、台湾の資料を発掘し、重要な史料を出版し、民国史、台湾史の研究に従事する達を鼓舞してきた。また、史料不足を補うため、歴史研究を更に多元化させ、庶民の生活に注目し、時代の変遷を反映してきた。

台湾史はオランダ統治、スペイン統治、鄭氏政権時代、清国、日本とそして中華民国時期と、その多元性が特色である。中華民国政権は 1912 年から 1949 年までは中国大陸にあり、1949 年

以後の発展と台湾の歴史は重複している。それゆえ台湾史は決して地方史などではなく、国史であり、県や市の地域史こそが地方史なのである。

近年来、台湾本土意識の向上に伴い、多くの人間が台湾歴史文化の追求と再構築に身を投じている。それによって、台湾史は内容がいっそう豊富になり、また、エスニシティの差、統治者と被統治者との差は次第になくなり、台湾に足跡を残した出来事のすべてを、台湾人民の共通の歴史の記憶であり、共同文化遺産として捉えるようになった。

## おわりに

台湾史研究は只の一本の支流から、今日の雄大な主流へと発展を遂げた。現在は独自に成立している学科の、ここにいたるまでの過程こそが台湾政治社会の変遷の縮図であると言えよう。

戒厳令の時代、台湾本土意識は抑圧され、台湾史研究はその発展を許されなかった。民主化と本土化の力が日増しに増大する中、台湾史研究は重視され、評価を得るようになった。台湾史研究は学校教育の現場へと、そして民間から政府部門へと次第に変化を遂げ、それは、台湾が中国より脱却して台湾本土化を歩み始めた事、そして植民地政策から脱却し、自らの道を歩み始めた事を着実に示している。